

魔術師は

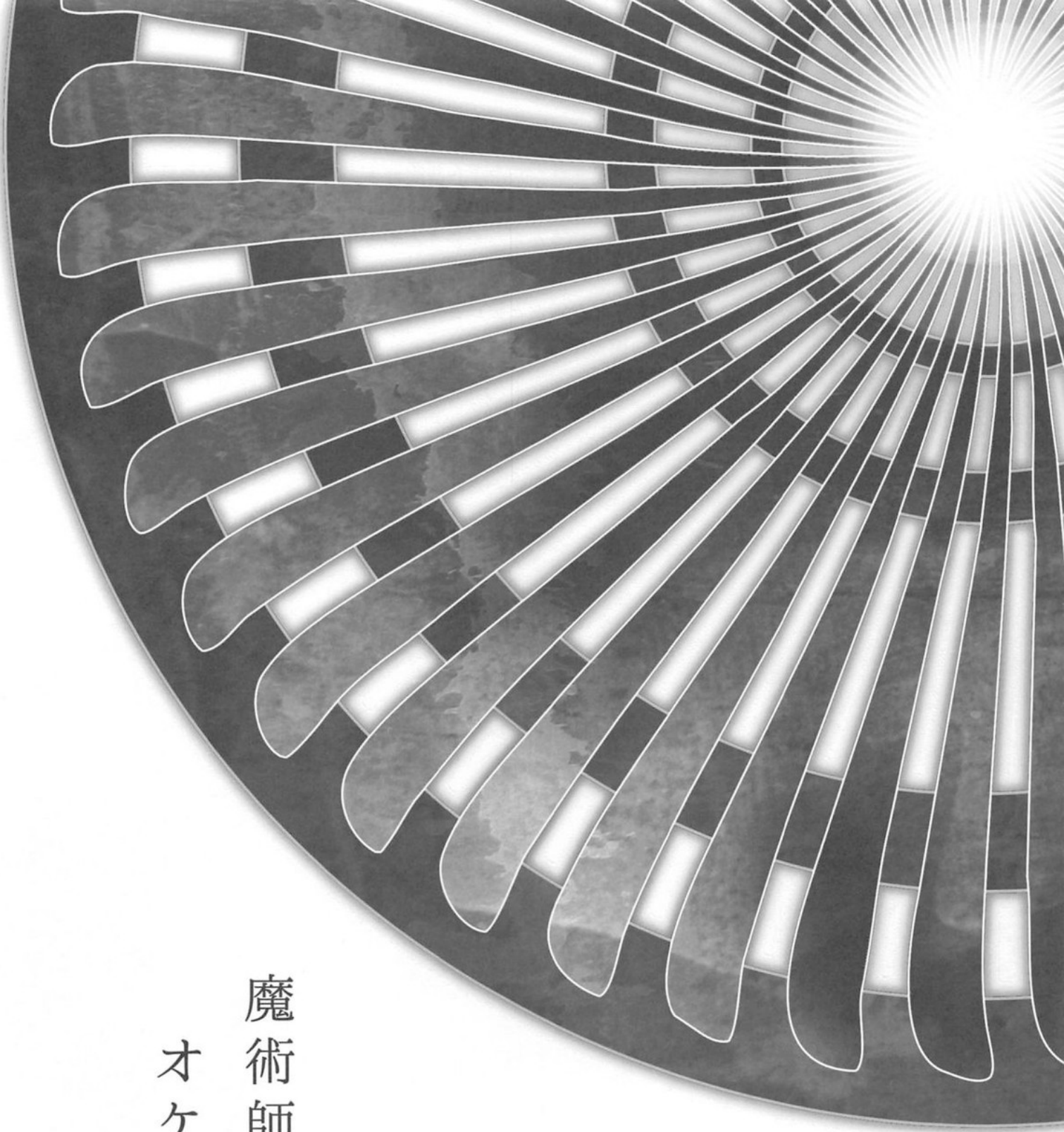
オケア
ア
ノス
の

夢を見るか

fate/zero
unofficialfanbook
TomoeManufacture








魔術師は

オケアノスの

夢を見るか



初めまして、そしごきげんようですともえです。
ウェイパーちゃん可愛いよ！って友達に勧められてみたら
あれよあれよという間にハマってしまいました…！
ていうかもう声優さんからして反則な二人なんですけど、
イスカンドルの包容力とウェイパーちゃんの成長とか
前夜祭でわがままな彼女と彼氏とか言ってましたけど（全くけしからん）
ほんとその通りで萌えと感慨深さとか…なんか色々あって良いですね！
これから先のことはとりあえず置いておいて
この二人の妄想をしばし楽しみたいと思いまーす♡

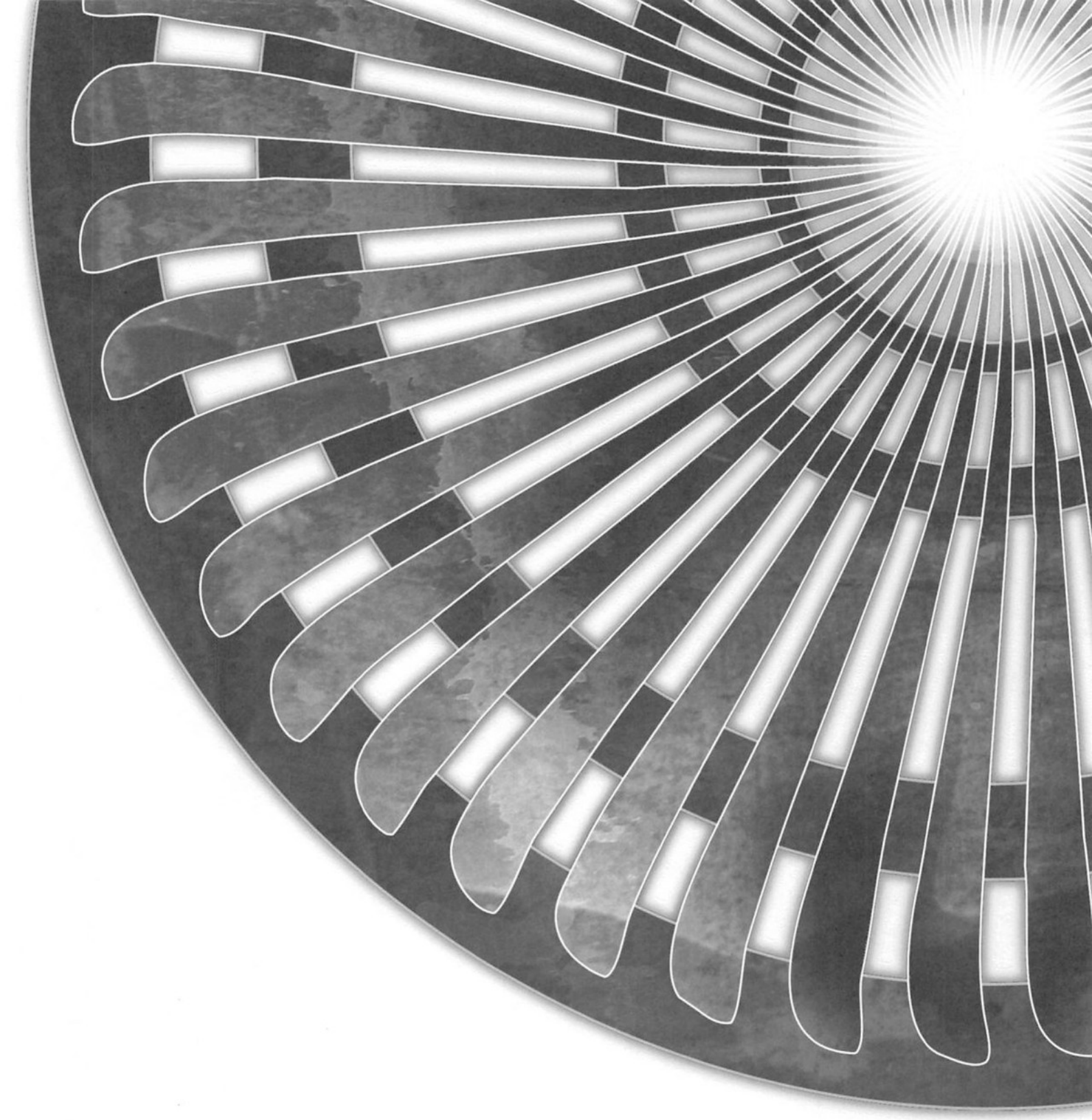
お話はタイトル通り？の、13話の直前くらい
キャスター組の隠れ家をアッラララーイした後くらいの時系列です。

そしてゲストに澁澤鳥子さんをお迎えしております！

両作品とも楽しんで頂ければとっても嬉しいです

ともえ







不思議なものだな

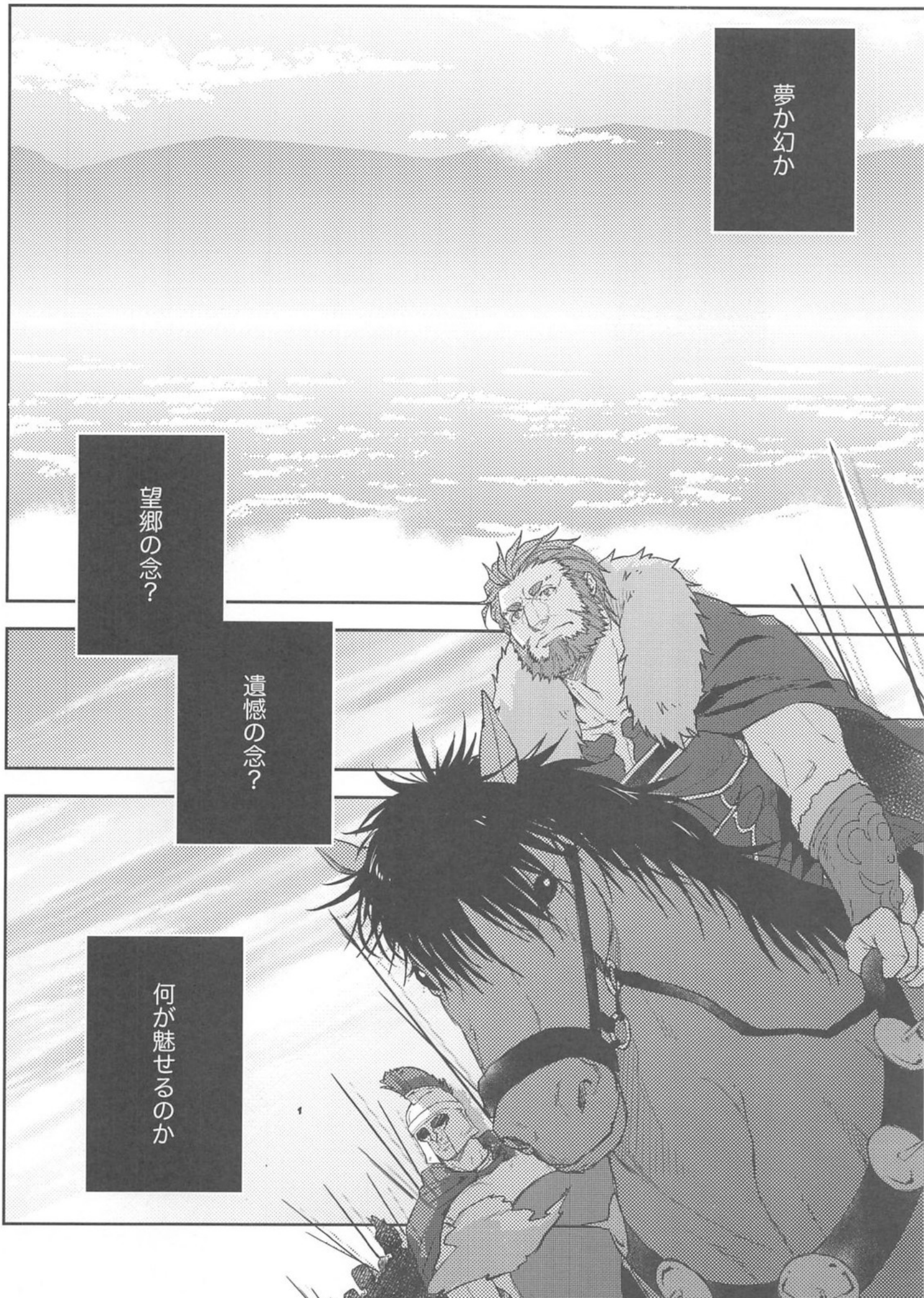
肉体がなくなるとも
見る夢は変わらないらしい


夢か幻か

望郷の念？


遺憾の念？

何が魅せるのか





ただー



血肉のない身体が憧^みる
オケアノスも

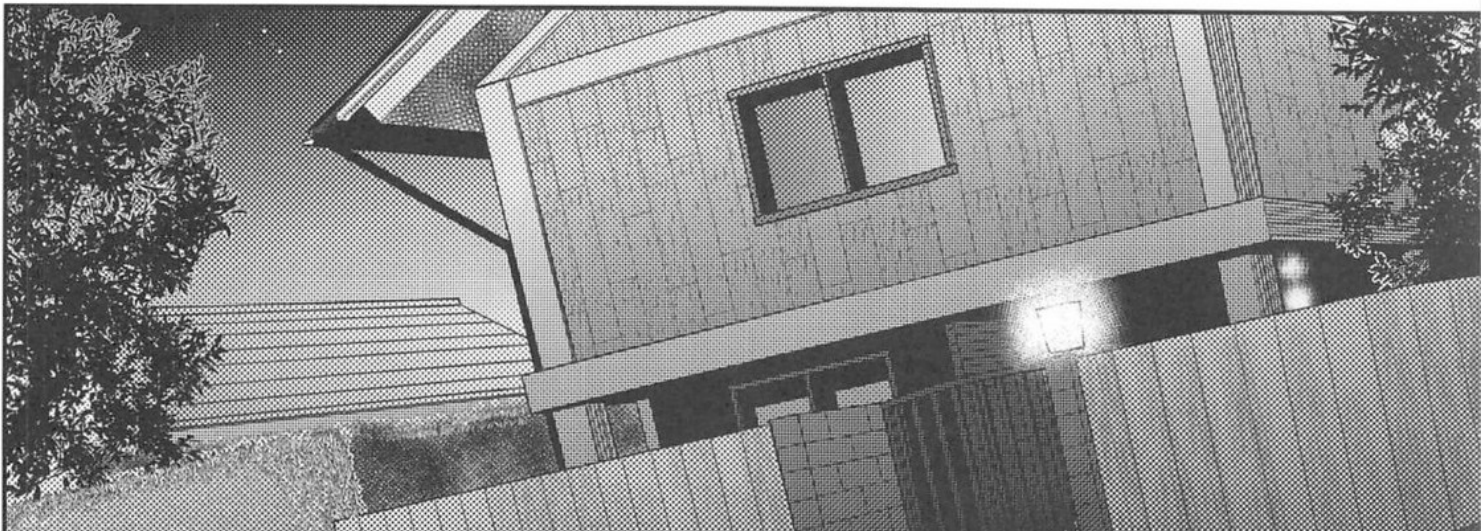


かつて夢に見

志向し

進軍したかの地は

清廉な風を湛えているのだ





キャスター達の隠れ家に
一番乗り出来たのは

僕、そして
ライダーの成果だ

でもまさか
あんな...

残酷な



思い出してどうする!!
バカ!!バカ!!

っ!!



...

お

お前のいびきが
うるさくて
起きちゃったんだよ！



ゼクッ

ふむ...

どうせ先達ての
キャスターのねぐら
の夢でも見たのだろうが



まったく
この坊主は

なんで素直に
う



見るなってほうが
難しいだろ

あんなの
見ちゃったらさ...

…まったく
仕方が無いのう



どか



喜べ坊主!!

余と一緒に
寝てやろう
ではないか!!

ガッ!!





や...やだ...
何すんだよ...!



やめろよお!!

スス...

目を閉じて

またあの悪夢を
見るのか?



...



ライダーア…

ラ…

ふん

目を開けて
余を見ているがいい



悪夢など熱で
消し飛ばしてくれるわ

は…

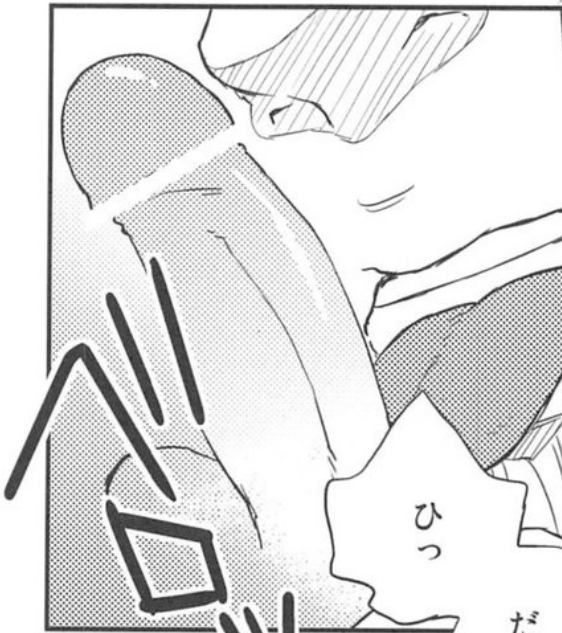




色気のない声を
出しおって

…なんだまったく

わああっ!!



ひっ

だつてえ…



集中せんか

はっ



わああっ…!!

うっ…はなせえっ



ふああっ



ああっ



うううっ…!!



...
...

...
...

なるほど
熱い



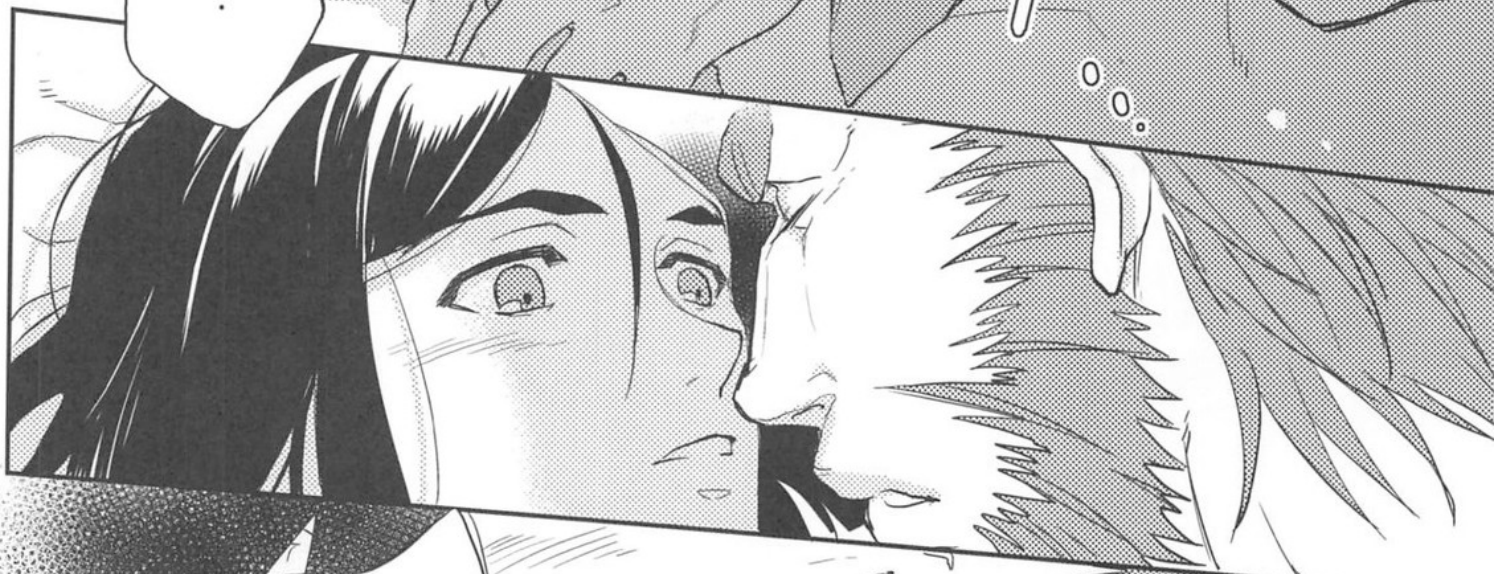
!!

...

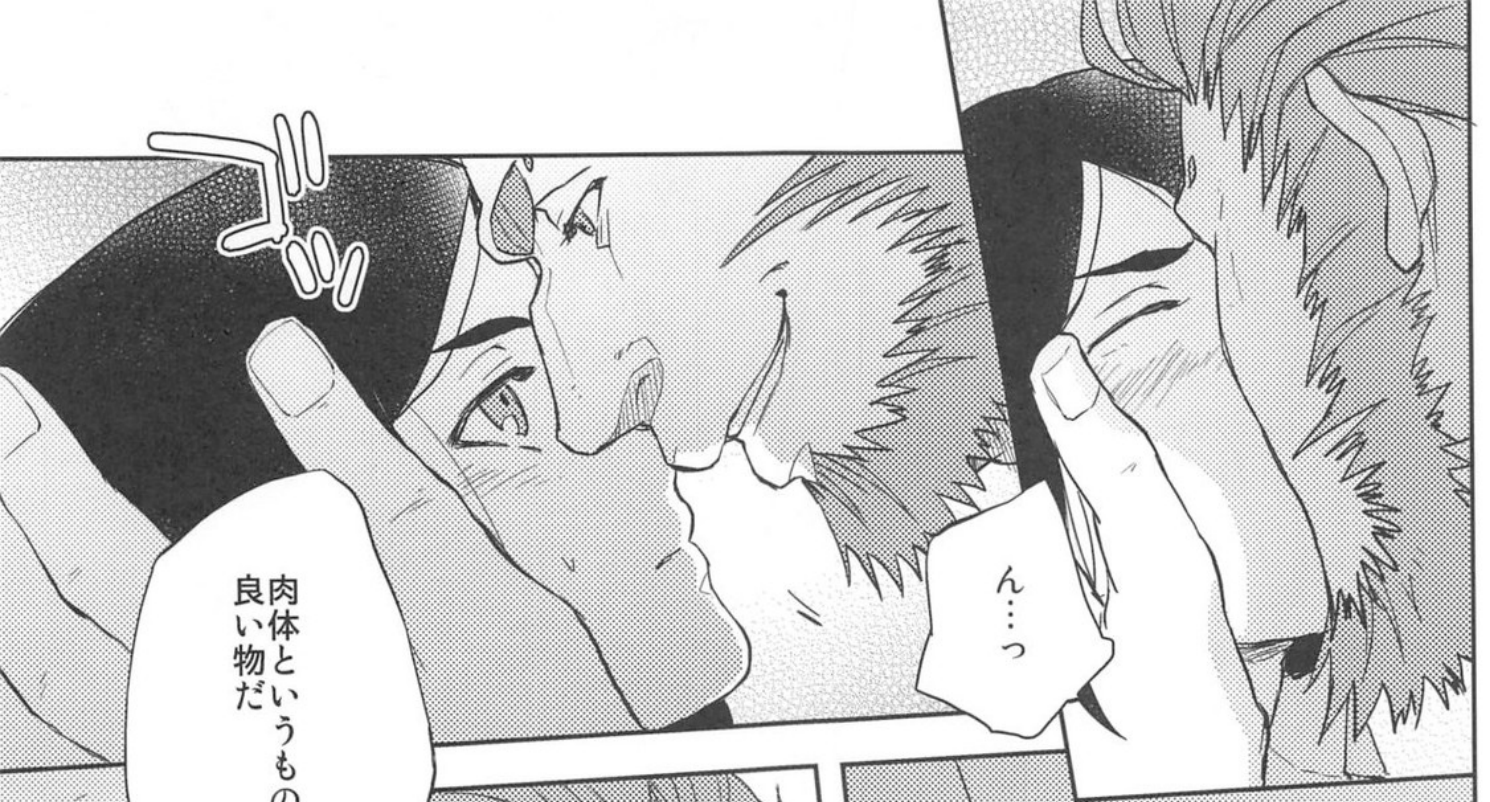




ラ...



...



肉体というものは
良いものだ

ん…っ



熱を持ち

それを発散する

あ…

!!



ひゃあ…!!

それこそが
肉体だ!



夢を持ち

思い描き

具現する





全ては
そういうことだと
思わんか?

んっ

んんっ

はぁ

はぁ

な：
何言ってるのか
わかんないよ：



熱くて——





それでいい

必要なものは
身を焦がす様な熱だ



灼熱で
何も考えられない
ようになればいい

その先にはきつと——





海だ



澄んだ

凧の、
海

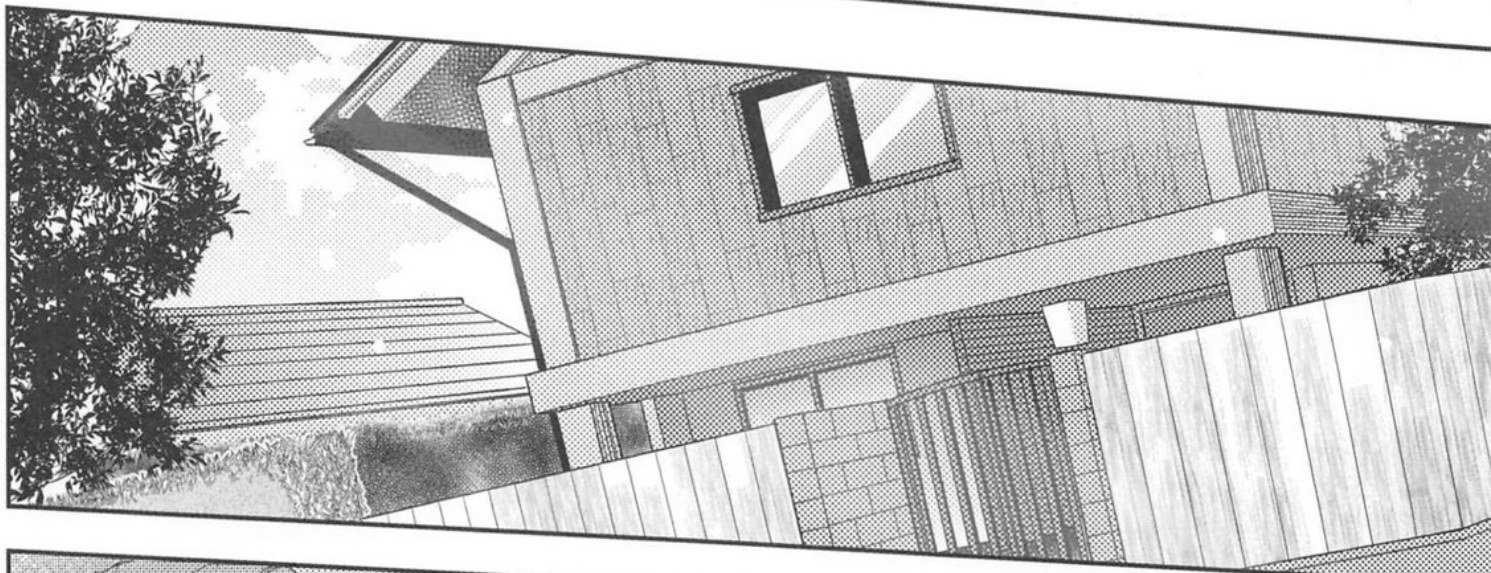


ライダー？





オケアノス

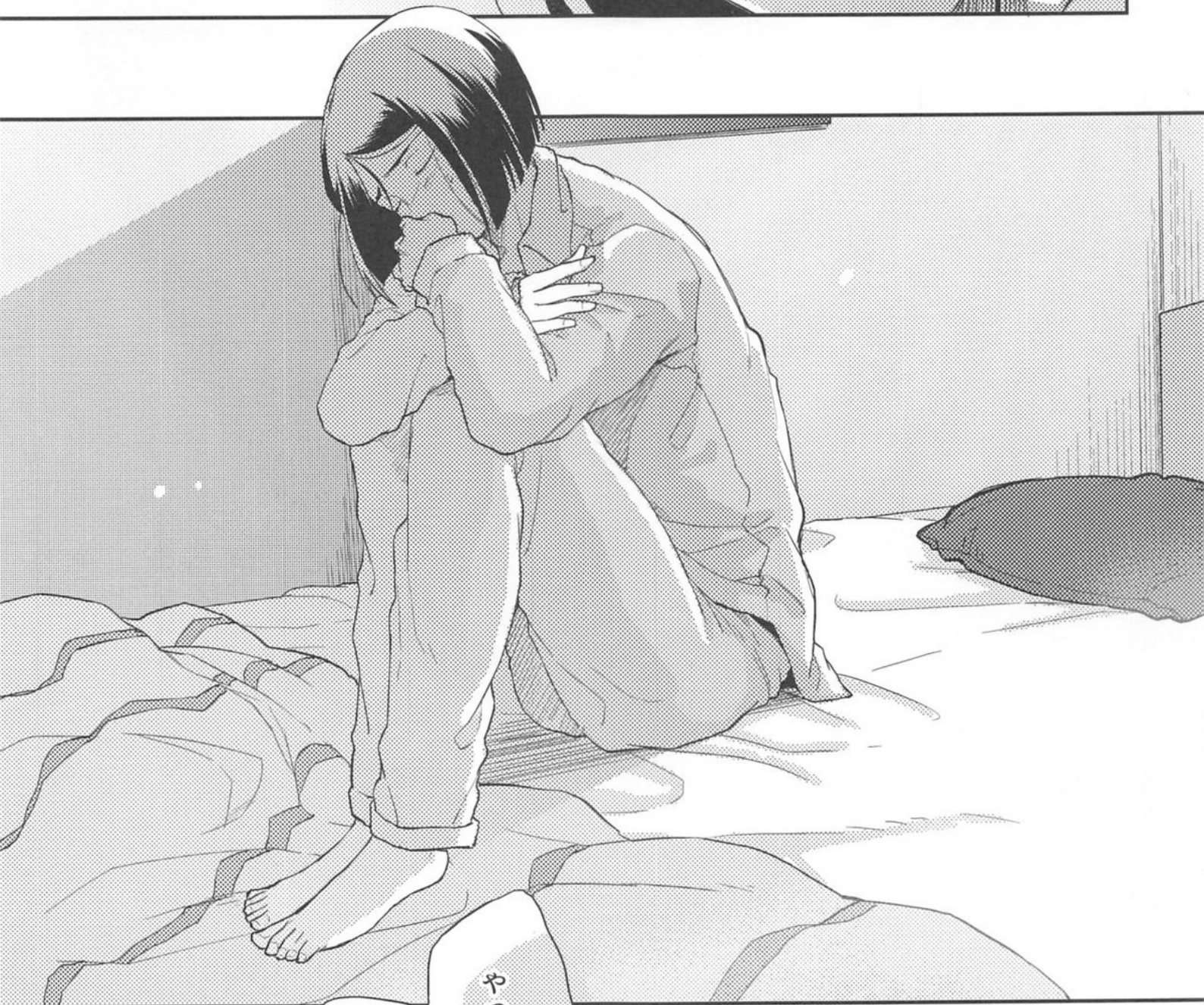


あ
の
夢
は



悪
い
夢
見
な
か
っ
た
な

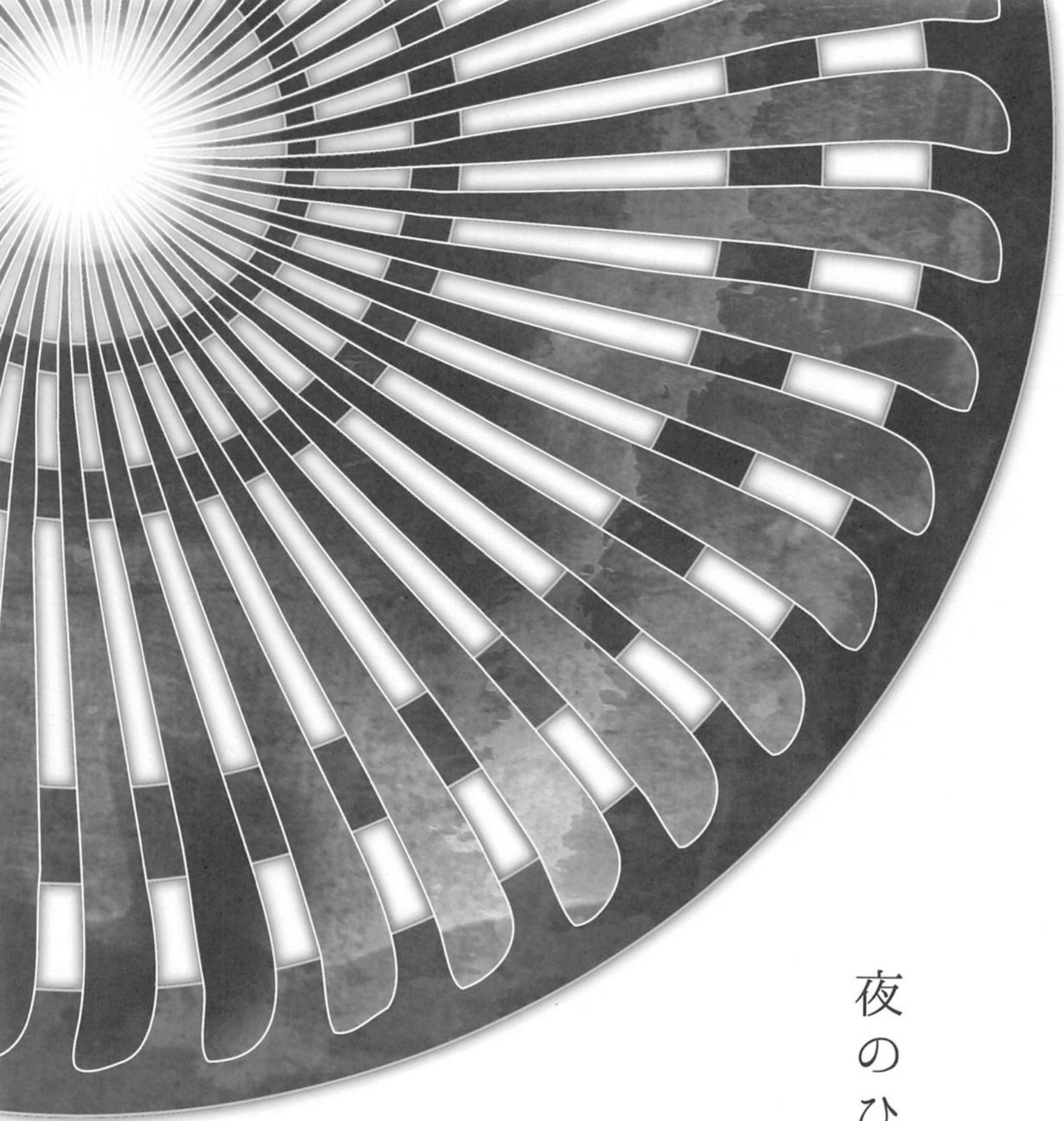
オケアノス



やっぱり

悪い夢じゃないか

END



夜のひと部屋

澁澤鳥子

夜のひと部屋

澁澤鳥子

夜が来た。夜になったのだった。マッケンジー夫妻の家の二階。ウェイバー・ベルベットののために用意された部屋には、大きな虎のような男が、床に寝ている。

風呂から出てきたウェイバーは、既にいびきをかいているライダーの身体をまたいで、明日の算段をするために器具を整えながら、ため息をついた。

全く、自分こそなんにも聖杯戦争の役に立っていないと思うが、今の状態ではライダーこそ役に立っていない。

他のサーヴァント達の仕合いに割り込んでいったり、勧誘したり、それこそ豪胆で胸のすく思いではあるが、なかなかそれを心から受け入れて、手放しで喜ぶことは難しかった。

ライダーを制御しきれない。

彼のいうままに一緒について行って、彼の宝具に乗って、そして意識を失う直前まで連れ回される。

他のマスターとサーヴァントがどのような関係性を持って聖杯戦争に挑んでいるかは知らねど、少なくともこんな風に、休日の世間のお父さん方のようにだらんと両手両足を広げて寝つ転がっていることはないだろう。

身体をまたぐのだけで精いっぱいだ。何せ体格が

違いすぎる。

「ああ」と口に出てしまったのは独り言だ。ライダーは完全に寝ているものと思っていたし、ウェイバーもそんなに大きな声のため息をついたつもりは皆無だった。

けれど。

急に背後の巨体が動いた。壁に移る影が、それを知らせる。

「長風呂だのう」

ライダーは欠伸を大きくしながら、ウェイバーの手元を覗きこんだ。数々の魔法道具。成果を上げられればいいけれど、そうでなければただの道具にすぎない。

ウェイバーはライダーを一瞥した。

「やることはいっぱいあるんだよ、バカ」

「だがな、夜は寝るもんだぞ」

「寝られるなら寝てる。少なくともお前のいびきが聞こえなくなるならな」

ウェイバーは視線を道具に落としたままで、後ろのライダーに言った。ライダーは額に手を当てて、

「そんなに余のいびきはアレか」

「アレだよ」

「……まあ、いざれ慣れようとも！」

豪快に笑って、またタオルケットの中にもぐって言った。

(慣れないよ)

ウェイバーは思っていた。特に今夜みたいにマッケンジー夫妻と飲み交わした後は、いびきがひどい。

はあというため息は尽きることを知らず、ウェイバーは地道に道具の整理をしていた。

そうすると、後ろでパンパンと布団を叩く音がする。振り返るとライダーが豪胆な笑みを浮かべて、ウェイバーを手招きしていた。

「なんだよそれ。そこに寝ろってでもいうのか？」

「然り！ 坊主のような若造には、睡眠は何者にも勝る！ 女でもおれば、そればかりではないが」

ライダーはウェイバーにそんな相手がいないことを熟知しているので（特にウェイバー本人が言ったわけではない。単なるライダーの勘が当たっているだけだ）、ただ早く若者は寝るがいいぞ、と言っているだけだった。

なんとなく、ウェイバーはそれも子供扱いされているような気がして癪に障った。片眉だけピクリと上がってしまう。あんまりそういう表情を表に見せるつもりはないが、気に食わなかったのは事実だ。

荒々しく道具を片付けたウェイバーは、「それじゃボクも寝るよ」と、意返しのつもりで、それも乱暴にライダーの横に滑り込んでいった。

(ほら、困るだろう。ボクをバカにすると寝場所がなくなるぞ)

ウェイバーはしてやったりの顔だ。

ところが、ライダーはまるできよんとしている。まさか我がマスターがそんなに簡単に冗談に乗って来るとは思わなかったからだ。

ウェイバーを見下ろして、じいっと顔を覗き込む。すでに目を閉じていたウェイバーにもその視線の先

が分かったようだった。すぐに目を開けて、

「寝ろって言ったのはお前なのに、何してるんだよ。寝られないだろ！」と、文句を言った。

するとライダーは、狭い布団の上で、小さく背中を丸めて、ううん、と一声唸った。

「なに？ なんなんだよ」

ウェイバーも起き上がって、ライダーを見上げた。ライダーはまだ唸ったままだ。

時折、ちらりとウェイバーを見る。その視線がなんだか気になった。

「あのなあ……」

「だからなんなんだよ」

ウェイバーが詰め寄ると、ライダーは一層困った顔になった。そしてちよつとだけ、狭いところではあるがほんの少しだけウェイバーと距離を取ると、

「冗談に向こう見ずに付き合うものではないぞ」

と、僅かに目に真剣な眼差しを乗せて言ってきた。

「どういふことだよ。そっちがボクに來いって言ったんだろ、バカ」

ライダーのたくましい肩を軽く押す。びくともしないが、ライダーは苦笑している。

「あのなあ、同衾がどういふものか分かってるのか？」

「同衾？」

聞いて、ウェイバーは少しその意味を考えた。あまり聞いたことはないけれど、どこかで聞いたこともあるような単語だ。目を上下させていると、ライダーがその無骨な手を、ウェイバーの柔らかな頬に

寄せてきた。

「えっ？」

と、思った時には、もう遅かった。ライダーの唇が、ウェイバーのそれに触れていた。すぐにはなれてしまったけれども。

「え？ え？ ええっ？」

ウェイバーは咄嗟に後ろに下がって、ライダーとの距離を取った。そのせいでしたたかにテレビに腰を打ちつけてしまった。

見るとライダーの方も、少し照れ臭そうに笑いながら、「そういうことだ」と呟いている。

ようやくウェイバーは意味を理解した。そうだ、この征服王の時代は、男色なんて友情の延長線上でいくらでも行われていた。だから一緒に寝ることは、それはつまり……。

「お、お前っ！ ボクをどうする気だったんだよ！」

ウェイバーは両手をぶんぶん振りまわして。半徑にライダーが入って來ないようにした。そんな危険な寝床に、意趣返しとはいえ入ってしまった自らを呪う。

ライダーは胡坐をかいたまま、頭をわしゃわしゃとかき乱して、またううん、まあ、うん、そうなの、と悩みはじめた。

それからしばらくの沈黙の後に、

「まあ、正直余にも限界というものがあるからな」と、ウェイバーの腕を掴むと、あつという間に身体の下に閉じ込めてしまった。

「ちよ、ちよつと、何すんだよ！ ボクは男と寝る

趣味はない！」

そこにライダーの精いっぱい甘い囁きが耳をくすぐる。

「坊主は余のマスターだ。この行為の意味を知らないわけではなかるう？」

そうして、徐々にウェイバーの寝間着の裾から手を滑り込ませる。ウェイバーの身体が、ひゅんつと縮み上がった。

「なにす……る、気……」

「残念なことだな、余はもう待てん」

ライダーはどこかそういうスイッチが入ってしまったのかぐいぐいウェイバーに体重をかけて来る。重い、熱い、恥ずかしい。全部がウェイバーの薄い身体に押しかかってきた。

「ごくんと喉を鳴らすとライダーはこれまででたこともないような穏やかな笑みをもって、ウェイバーに微笑む。

「痛いようにはせん。坊主の苦しむことはせん。だが、余には必要だ」

そう耳元で言われて、ウェイバーの最後の咎も半分壊れかけてしまった。

ライダーは、からかいからの事故だとしても、ウェイバーを欲しがっている。魔力注入のため、というよりは、酒も女もセックスも満喫してきた男が現界してきたのだから、単に性欲処理が溜まっていたのだろうと。

これでもしも今回の聖杯戦争で負けでもしたら、またライダーは二千年も昔の仲間と主に、魂だけの

存在になつてしまふ。

だからと言つて、今まで男とセックスなどしたことの無いウェイバーには、どうしてもその相手がライダーだということに、不安と興奮を覚え、そして今はまだ不安の方が勝っているのだ。心臓の動悸が抑えられない。どうしてライダーの軽口に乗つてしまったのだろうか。

だけれど、もう逃げられそうにもなかった。だつてウェイバーはライダーが好きだ。そういう意味でも、好きなのだ。好きなひとに求められたら、例え相手が男で、自分より二倍はあろうかという体躯で迫つて来られたら、なすすべもない。まだ好きという気持ちだが、拒む要因になっているのは皮肉な話だ。

ライダーが柔らかく、ウェイバーの髪を梳く。猫か、犬でも撫でているようだ。

その度にウェイバーの身体は跳ねる。

「なあ、いつかは余も坊主も、共に果てなければ、終わらんぞ」

そう言つてライダーが身体中を触つて来る手は、ひどく彼の普段の行動に合わず、優しくかった。

落ちた、とウェイバーは思った。

もうこれは最初から決まっていたことなのかもしれない。そしてそれが幸運スキルのアドバンテージのひとつであるとするれば、これは拒んでいいものか……。

結局ウェイバーは何も気の利いた返し文句もできずに、気付いたらライダーの前で、全身を暴かれて

いた。見た目以上に相手を大事にするライダーは、ウェイバーのふるつと震える全裸の姿を見て、本心かどうかは分からねど、「うむ。まずまずだ。尻あたりはうまそうだ」と微笑んだ。

激しい口付けが、今度は振つてきた。口の中に、ライダーの飲んだ酒の匂いが充満していた。まだウェイバーは酒の味を知らない。こんなものなら飲まなくてもいいやと思つていたのに、間にライダーが入ると、とても甘く感じる。自然と閉じてしまった目。そこにライダーの顔を映すことができないのが酷く悔しかった。

（流されてる？ いいや、これは必要なことだから……？）

ウェイバーは目を閉じながら、ライダーの口の中に舌を絡め取られつつも順々していた。征服された女のようにには思われたくはなかった。けれど、やっぱり、そうなのだ。

ライダーがそれを承知と受け取つて、徐々にウェイバーの寝間着の裾から手を差し入れて来る。ひんやりとも、暖かくもない、サーヴァントの体温だ。それが少し悲しかった。

後ろに指が回つて来る。ライダーはまた、苦笑いをした。こそばゆい感覚の中で、ウェイバーは「なんだよ」と悪態をつく。

「いやな、こんなに狭い鍵穴では、余の宝物は収められんな、と」

ウェイバーの顔が真っ赤になった。

「い、入れるつもりだったのか！」

咄嗟に身体を話そうとしたけれど、それはできなかった。股間に当たるライダーの膨らみは、すでに屹立しているようだった。

「坊主」

「坊主っていうな」

「いいんだ、坊主。まだお前は、そうなんだからな」そう言つてくるライダーの目は優しくかった。

それから、様々な身体のありとあらゆる部分を弄られ、ウェイバーは今まで感じたことのなかった感覚に、小さく声を囁み殺した。

舐めてみると言われ、ライダーの陰茎の先だけ、舌を這わせた。それでライダーは達してしまつた。なんとなく「ごめん」と謝れば、ライダーは豪快に笑つて、「余をこうさせるのには、なかなかの手腕が必要だ。坊主は向いているんじゃないのか？」と、褒め言葉ともけなしているとも分からない返事が聞こえた。

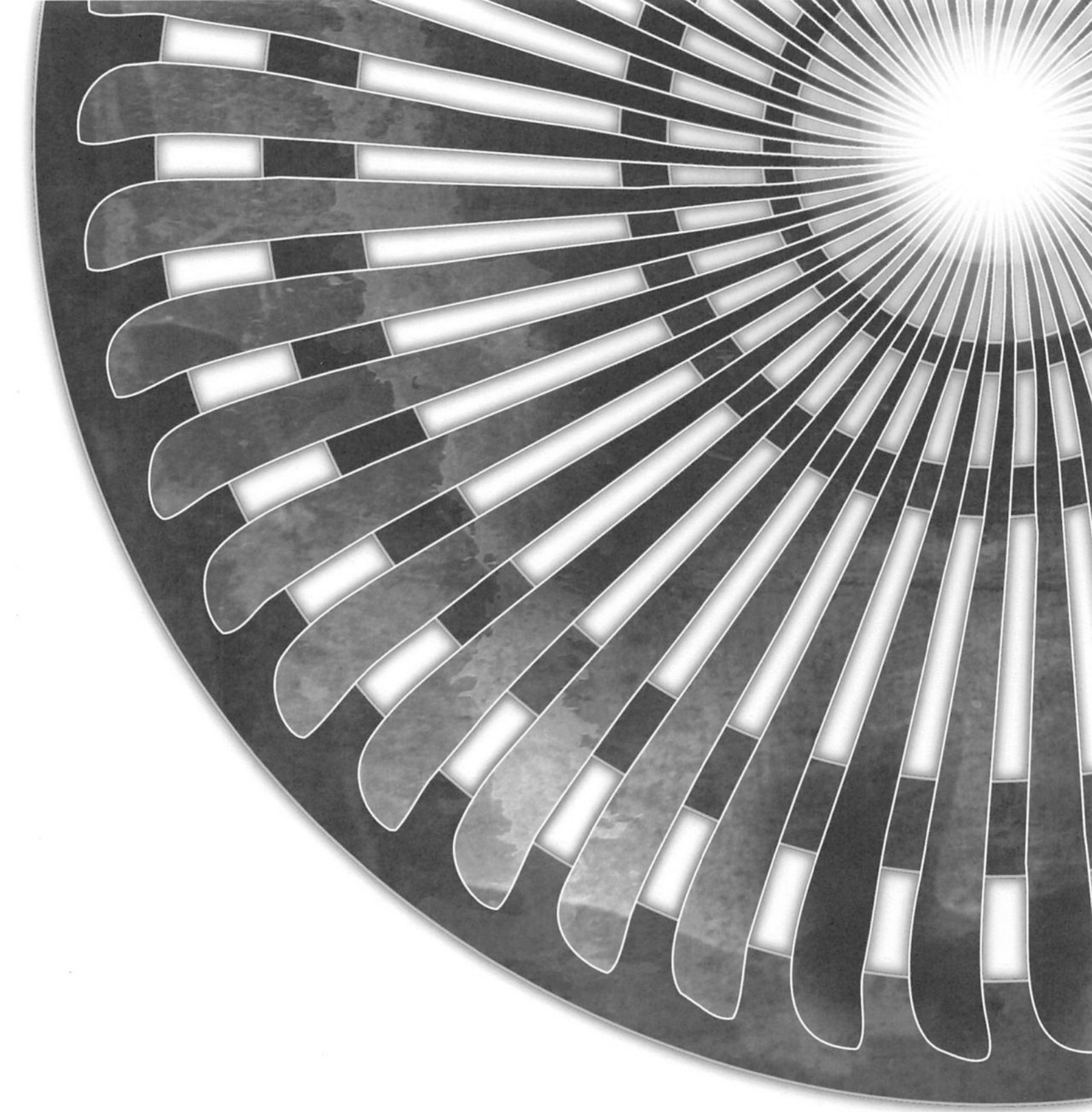
結局のところ、身体をつなげることはできなかった。きつとウェイバーの心も、またそれには付いていけなかったのだろう。

お互いの手で果てた、そんな夜をウェイバーは思い出した。もう何年も前のような気がする。あの時、最後までライダーを受け入れることができたら、今自分はどうやって生きていたのだろうかと思つた。

一瞬でも、繋がっていれば。

そんな過去のことを思い出しては、ウェイバーは時計塔でぼんやりと日々をすごしていた。

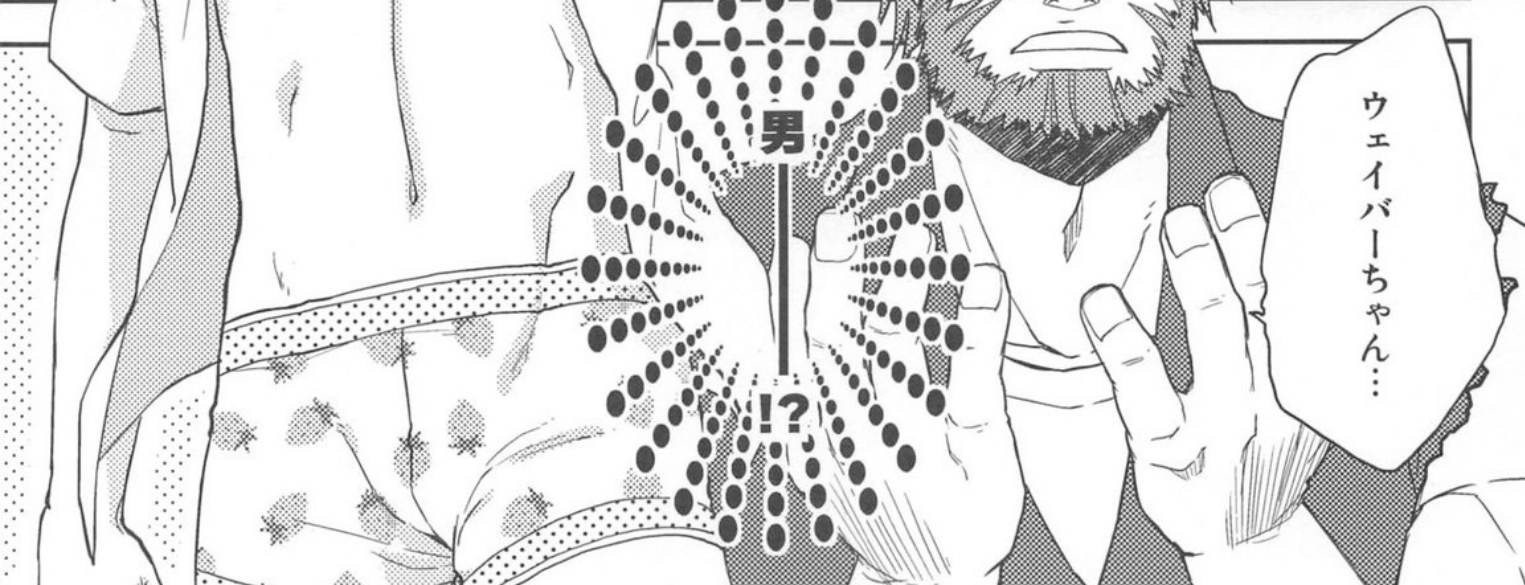
終わり



戦車男

の撮影はこんなだったかも
な妄想漫画





こんなに可愛い娘が女の子のわけがEND

Waver Weivet



ピクシブに投稿したウェイバーちゃん
本当はカラーページにしたかったんですが(´;ω;｀)

最後までお付き合い下さりありがとうございました！

色々書きたかったんですがもう（そしてまたもや）タイムアップです…

戦車男ネタとか今度またちゃんと書きたいなと思ってま〜す♡

そしてゲスト原稿にとりこさんをお迎えしました——！！

ほんとにありがとうございましたっす〜(*´艸`*)

イスウェイってラブラブなのに切ないんだろ…

って結末をなんとなく知ってるからっていうのもあるんですけど

お互い真逆なタイプだし、特にアニメ前半はウェイバーちゃんが
聖杯戦争に一生懸命だったしでお互いの理解とかっていうアレじゃ
なかったんでしょうか…

でもイスカandalはやっぱり大人で余裕があって

ウェイバーちゃんのこと見守ってて…

う〜ん濃いなあ…(´ω`)

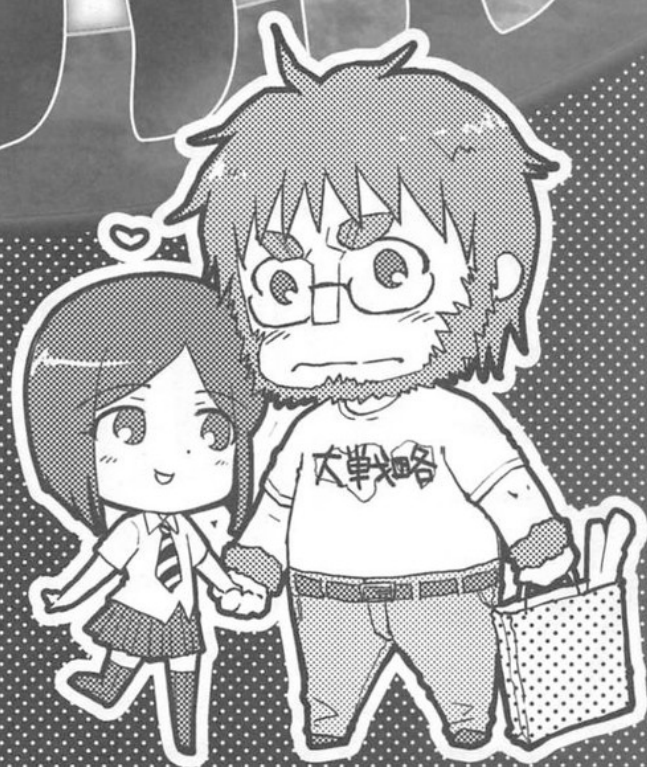
というわけで、とりあえずイスウェイ一冊目でした！

この本が13話の前の時間軸なので

アニメに沿ってまたイスウェイ本かきたいなーと思っておりますので
どこかで見かけたらどうぞよろしくです！

やっと春めいてきた日でも

くせでストーブをつけてしまうともえでした〜！



4

マイレールニルベットの

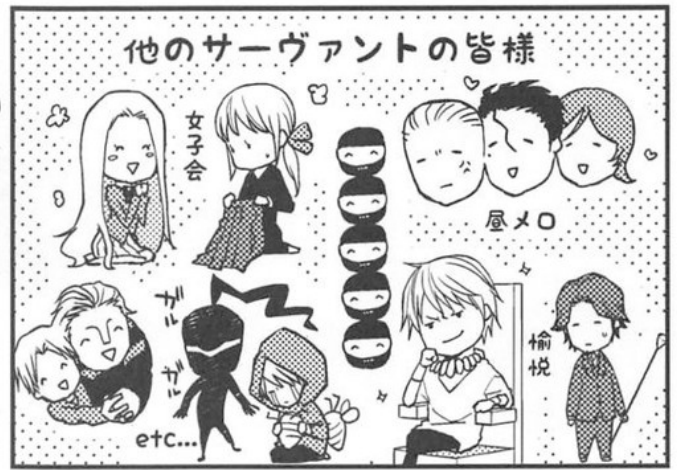


アム+のライオンは
レイヤタ!!!
のコーナー♡

こんなライダーはやだやだやだ!!

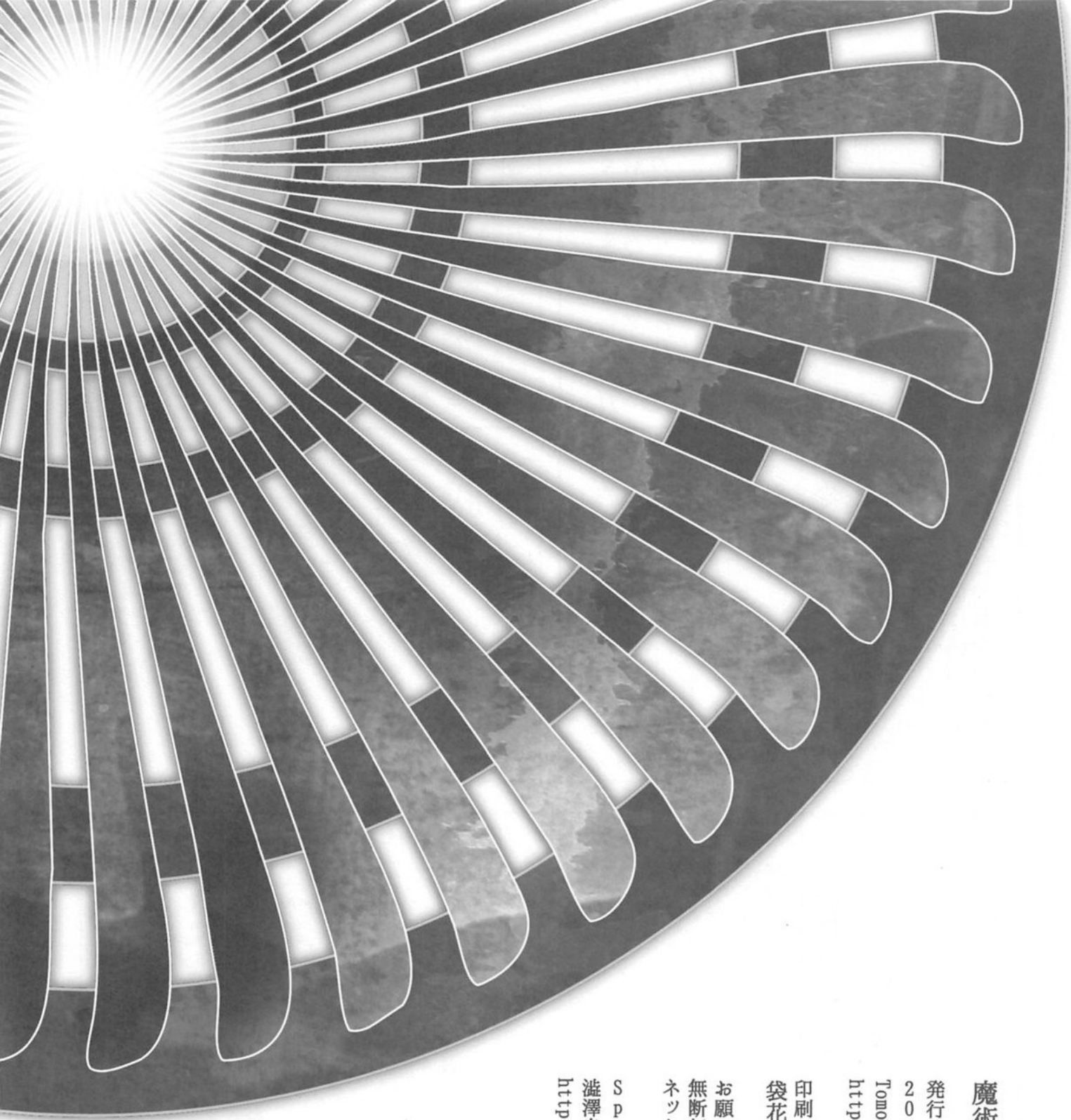


こんなライダーはいやだ!!



キャスター戦にて

比較的大正解な方です。



魔術師はオケアノスの夢を見るか

発行

2012年4月22日

TomoManufacture / トモキ

<http://tomoemanu.fem.jp/>

印刷

袋花子様

お願い

無断転載禁止

ネットオークションへのご出品はお控え下さい

Special Guest ☆

濫澤鳥子

<http://morihako.jp/>







Tomoe Manufacture

**please support artist ,
if you like this**